

第30期昭島市社会教育委員会議

活動の記録

テーマ 対話から地域力を育む社会教育

令和2年9月

目次

はじめに	1
第1章 第30期昭島市社会教育委員会議について	2
1 任期と構成メンバー	2
2 主な活動内容	2
第2章 第30期昭島市社会教育委員会議 定例会について	2
1 活動方針	2
2 検討課題	2
(1) 委員各々の所属団体等の課題について（平成30年10月～12月）	2
(2) ボランティアとは何か（平成31年1月～4月）	3
(3) 第27期の建議の検証とあきしま会議の運営・振り返り（令和元年5月～8月）	4
(4) 若者と地域、そして社会教育（令和元年9月～10月）	5
(5) 観察研修について（令和元年11月～令和2年1月）	5
(6) テーマについて（令和2年2月）	5
(7) 緊急事態宣言期間における社会教育活動の状況（令和2年3月～5月）	6
(8) コロナ禍に再開した定例会、および、社会教育活動の状況（令和2年6月～8月）	8
第3章 市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議について	11
1 経緯	11
2 趣旨	12
3 各回の状況	12
4 あきしま会議から見える「市民のニーズ」	20
第4章 「対話から地域力を育む社会教育」とこれから	21
おわりに	22
第30期社会教育委員名簿	23
各委員からの一言メッセージ	24

はじめに

昭和 35 年 4 月に発足した昭島市社会教育委員会議は、今年、60 年目を迎えます。しかし、我々第 30 期昭島市社会教育委員会議（以下、第 30 期）にとっては、激動の期であったと思ひます。

令和 2 年 2 月、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号での集団感染など、日本を含む世界の国や地域で新型コロナウイルス感染症が拡大しました。その対応として緊急事態宣言の発出等により、我々においても当初予定していた視察研修を中止したり、3 月以降は定期会議も書面審議にしたりするなどの状態が続きました。

さて、平成 28 年 9 月第 28 期昭島市社会教育委員会議は、答申「あきしま学びぷらん（第 2 次昭島市生涯学習推進計画）の中間評価について」の中で「生涯学習はまちづくり」であると述べています。それを踏まえて、平成 30 年 9 月に当時の第 29 期昭島市社会教育委員会議（以下、第 29 期）は、「市民相互と地域のつながりを育てる生涯学習を推進するための社会教育の役割」（建議）を教育委員会へ提出しました。第 29 期では、市民の声を聴く機会を設け、併せて市内で様々な活動をしている市民グループをつなげようと、平成 30 年 5 月に「市民のニーズを活かす・つなげる・あきしま会議」（以下、あきしま会議）を初めて開催し、建議の中で市民、地域、行政が生涯学習というツールを使いこなすための解決策として、あきしま会議の継続を提案しました。そこで、我々第 30 期も第 2 次昭島市生涯学習推進計画の基本目標「市民相互と地域のつながりを育てる生涯学習」の展開において、あきしま会議は有効な手段であると位置づけ、改善を図りつつ、継続して開催してまいりました。

この活動についての話し合いを進めながら、さらに、世代を超えて対話の機会をつくること、あきしま会議から市民のニーズを発信していくことの重要性などを実感し、テーマを「対話から地域力を育む社会教育について」としました。

しかし、新型コロナウイルス感染症による経済や文化、社会のあらゆる分野での深刻な事態は依然続いており、人が集うことなどの制限が生じるなど、これまでの私たちの暮らし很大程度に変容しようとしています。

今回作成する活動の記録が今後の社会教育の在り方を考える一つの指標となるよう、願っております。

第1章 第30期昭島市社会教育委員会議について

1 任期と構成メンバー

第30期は、平成30年10月1日から令和2年9月30日までの2年間を任期とし、学校教育関係者2名、社会教育の関係者3名、家庭教育の関係者1名、学識経験者2名、公募の市民2名の10名で構成されている。このうち7名が前期からの委員である。

2 主な活動内容

第30期の主な活動は、毎月の定例会、第29期より社会教育委員の取組として実施している「あきしま会議」の実施（3回）、そのほか各種研修会への参加である。これまで各期で実施してきた自主研修は、計画したものとの新型コロナウイルス感染症の感染抑止のため中止とした。活動内容についての詳細はそれぞれ後述する。

※社会教育委員の概要については、参考資料1「あきしまの社会教育委員ガイド」参照

第2章 第30期昭島市社会教育委員会議 定例会について

1 活動方針

社会教育委員が主体的に「あきしま会議」を実施し、市民相互のつながりをつくると同時に、市民のニーズを捉え、まちづくりに寄与する生涯学習活動推進の方策を練る。

2 検討課題

（1） 委員各々の所属団体等の課題について（平成30年10月～12月）

第30期のテーマを検討するにあたり、委員が所属している団体、あるいは、活動の中にどんな課題があるかを出し合い、身近なところから社会課題を見つけ出すことを試みた。その結果については次の通りである。

高齢化の問題

- ・指導者の高齢化
- ・構成員の高齢化

担い手の減少の問題

- ・加盟員の減少
- ・自治会加入率の低下
- ・後継者不足
- ・PTA役員の選出

コミュニティ同士の連携・コミュニケーションの問題

- ・学校と社会の連携（個だけではなく、社会の作り手を育てるということ）
- ・保護者と地域・自治会とのかかわり

家庭力の問題

- ・共働き世帯・片親家庭増加や子育て世代の貧困などによる家庭教育の衰退

団体の活動目的や社会の仕組み等への理解の問題

- ・自治会の清掃会の目的はなにか
- ・組織・仕組みの問題
- ・SDGsと社会的排除解消
- ・障がい者スポーツに対する理解と協力

ボランティアに関する諸問題

- ・役員・ボランティア活動に対する意識
- ・市内の中学校での学習支援ボランティアの実態

(2) ボランティアとは何か（平成31年1月～4月）

前述の課題を整理すると、組織の高齢化や役員不足などの課題が多いことがわかる。ただ、我々が自治会活動、PTA活動、市民活動など、市民が行っている活動について語るとき、実際にさまざまな場面や状況で幅広く「ボランティア」という言葉を当てはめていたことに気が付いた。そこで、ボランティアとは何かについて学び、我々は、「ボランティア」とは奉仕活動とは異なり、その活動に関わる人の主体性・自主性が尊重され、自己有用感を得られる活動のことと捉え、その後の議論の中で使い分けることにした。

このころの議論の中で、今後の参考になると思われることは次のとおりである。

地域の中学校でボランティアカードを作っており、年度初めに学校区の自治会に中学生のボランティアが必要なイベントはないか聞いて、1年間のイベントのボランティアを必要としている項目を出し、生徒がその中から何をするか選ぶという取り組みをしている。

最近の子供たちは、自己有用感が低いと言われていて、自分が誰かの役に立っているという経験を学校生活の中で積んでいくことも大事だ。顔の見える関係の中でやれることがよい。

自分が人のために役立つと感じることは、とても大事なことだ。自分が人の役に立つことによって、自分の存在感を知るということなのだろう。

人の足りない自治会を動ける子どもたちとマッチングしていく仕組みがあるとよい。

ボランティアをやる人はいい人だというイメージがある中で、ボランティア活動をしたくても様々な事情でできない人もいるので、そこで差別が生じてはよくない。

地域貢献がボランティア精神を育む役割を担っているといつてもよいのではないか。

(3) 第27期の建議の検証とあきしま会議の運営・振り返り（令和元年5月～8月）

今期のテーマを決めるにあたり、前項2、3のとおり、各委員の所属団体の課題を出し合い、そこから発展してボランティアについて学んできた。次に、我々がしたことは、平成26年度の建議「昭島市における地域の活性化に向けた社会教育について」（第27期）の特に第4章以降の提言について、その後どう活かされてきたのか、地域の活性化がどのように進んでいるのか、どんなことがされてきたのかを検証することである。これを通して、推進されたもの、課題が残っているものを分析し、今期で取り組むべき方向性を見つけ出すことを試みたのである。

検証の結果はつぎのとおりである。

①第4章第1「市民に向けた方策」について

- (ア) 「市民の力を借りる」の中の「地域の成り立ちを学ぶ」については、学名が付与されたアキシマクジラを活用しながら今後広げていける。
- (イ) 「情報の伝達の仕方を工夫する」について、市民意識調査などを見ても進んでいるとは言えない、リーフレットの配置や掲示板の利用の仕方など、まだ手が入れられていないところがある。

②同章第2 「地域に向けた方策」について

- (ア) 「地域に向けた方策」に記されている考え方が、現在実施している「あきしま会議」の原点となっている。
- (イ) 「若い力を活用する」に書かれている、つつじが丘地域の地域防災については、その後広がりを見せている。
- (ウ) 「イベントを活用する」では、「市民にどこかしら「やらされ感」があるのではないかということの否めない」というところが気になったので考えていきたい。
- (エ) 地域に子供たちが必要とされることの大切だ。
- (オ) 「若い力を活用する」というのが、一番重要なのではないか。

これらの話から、中学生を対象としたある調査について話題提供があり、次回その調査の検証とともに若者と地域との関係や市民ニーズなどについて、さらに議論していくことになった。

(補足) 令和元年6月と7月の定例会は、主に7月21日に実施したあきしま会議の運営について、および、実施後の振り返りを行った。あきしま会議については第3章（P.11～）にて後述する。

(4) 若者と地域、そして社会教育（令和元年9月～10月）

前述の中学生を対象とした調査によると、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という問い合わせに、昭島市は約44%の生徒が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している。これは全国の数値50.6%と比べると低いが、東京都の40.1%よりも高い。また、「地域や社会をよくするために何をするべきかを考えることができますか」という問い合わせでは、昭島市では36.6%の生徒が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している。（こちらは全国や都よりもやや低い）この結果から、子供たちには「何かやりたい」と参加する意欲はあるが、その機会に恵まれていないのではないかという意見があった。

この調査のほか、市内小学生・中学生の「子どもの主張意見文コンクール作品集『未来をひらく』」には、彼らがしっかりと「まち」に目を向け、何をすべきかと考えているかについて書かれている。こうした子供たちと意見交流する場として、あきしま会議がなり得るのではないかという話もあった。

このころ、「一人ひとりが対話の文化に慣れること」「対話に参画する力につけること」が大切であるということも、話されている。

(5) 観察研修について（令和元年11月～令和2年1月）

当委員会では、他市の事例等を直接伺う観察研修を隔年で行っている。これまでの議論の内容を踏まえつつ、活動方針にもある「市民のニーズを捉える」ことについて観察先を検討していくにあたり、今回は当時まだ建設中だった「アキシマエンシス（教育福祉総合センター）」（以下、アキシマエンシス）が指定管理者制度で運営されることも決まっていたことから、指定管理者における市民のニーズの把握の仕方、市民活動活性化の取組などについて学んでみたいということになった。そして、神奈川県小田原市の「おだわら市民交流センターUMECO」と静岡県清水市の「静岡市東部勤労者福祉センター 清水テルサ」と調整し、令和2年2月28日～29日に実施することが決まっていたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむなく中止することとなった。

(6) テーマについて（令和2年2月）

これまでの議論を経て、令和2年2月の定例会において、第30期のテーマが「対話から地域力を育む社会教育」と決定した。詳細については、次の「第3章 市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議」の記述も踏まえて、第4章にて後述する。

(7) 緊急事態宣言期間における社会教育活動の状況（令和2年3月～5月）

テーマが決まったものの、このころから新型コロナウイルス感染症拡大の懸念がにわかに広がりを見せ始め、突然3月2日から春休みが終わるまでとして全国の学校が臨時休校となり、世間ではソーシャルディスタンスの確保、「密閉・密集・密接」の3密回避、不要不急の外出自粛など、感染拡大防止対策に日本中が取り組むことになった。さらに4月7日に発出された緊急事態宣言により、臨時休校延長（市内の小・中学校（公立・私立）は、5月末まで継続、6月1日より再開）、時差出勤、在宅勤務（テレワーク）、オンライン会議の普及など、我々の社会生活はわずか数か月で一変した。

また、緊急事態宣言は個人の生活だけではなく、広く社会教育活動にも大きな影響を与えることとなった。市内の状況については、次のとおりである。

①社会教育関係施設について

(ア) アキシマエンシス

3月28日にグランドオープンすることになっていたが、開館と同時に休館となり、予定されていたすべてのオープニングイベントが中止になった。各団体でチラシの作成など準備がなされていたものもすべて使えなくなってしまった。

(イ) 市立会館等公共施設

市内公共施設は、当初3月2日から3月31日まで貸室の利用は休止し、公共予約システムと簡易印刷機のみ利用可能となった。さらにその期間は延長となり、5月6日から5月31日まで完全に休館し、市民の活動や学習の場としての利用は困難になった。

②団体活動について

(ア) 体育協会

定期総会が書面評決となったほか、春季都民体育大会、市民体育大会、市民レクリエーションフェスティバルなどの9月までの事業がほとんど中止となった。

(イ) 文化協会

定例の理事会だけではなく、春の芸術祭、後援をしている秋の文化祭、研修旅行など全てが中止となった。

(ウ) スカウト育成連絡協議会

定例会議が中止になったほか、定期総会は書面審議となった。また、ボーイスカウト、ガールスカウトも学校の臨時休校に伴い、日本連盟、東京連盟からの要請もあって活動を自粛することになった。

(エ) 学習サロン活動、生涯学習サポーターの会まなぶンの活動など

市立会館等で活動できるすべての施設の休館に伴い、開催できなくなった。その他のサークル活動についても同様である。

③学校教育について

学校では、緊急事態宣言に先立つ3月2日から臨時休校となったことから、小中学校における学習支援、部活動などがすべて中止になった。卒業式や入学式は参列できる保護者の人数を限定したり、在校生や来賓の参列を取りやめたり内容を簡素化して行われた。各学校では、「つながる・守る・切り拓く」をテーマに、家庭の協力を得ながら可能な範囲で臨時休校中の児童・生徒の学習や健全育成のための取組を行った。その一環として、家庭との連絡を絶やさないよう努めた。児童・生徒がストレスを感じながら自宅での生活を送っていること、自力で学習課題に取り組んでいることなどに関する相談を受けることがあった。家庭のニーズに応えるよう、相談活動や情報発信等に取り組んだ。市立小・中学校が協力して学習動画の配信も順次行っていった。また、休校期間中も学童クラブが開所されたが、開所時間外には学校でも児童を預かった。5月には校庭や図書室の開放、児童・生徒が来校する相談日を設けるなど、児童・生徒の居場所確保や安全・安心のための工夫もされていた。地域からも様々な協力の申し出が学校に届けられ、これまでの連携の成果と捉えている。

④社会教育委員会議について

当定例会も例外ではなく、3月から5月までの3か月間は書面審議としたため、我々にとって最も重要な建議について十分な検討ができなくなった。そこで、第30期は建議ではなく「活動の記録」を作成することにした。しかし、直接的な議論をすることができない中で我々の活動の記録をまとめていくことは、なかなか大変なことだった。

⑤市民の人権としての学習権について

さて、ここまでに記してきたとおり、突然の新型コロナウイルス感染症の影響により、あらゆる場面で人と人が顔を合わせることが制限され、社会教育活動も大きな制約を受けることとなった。新型コロナウイルスに関する知見が限定的な段階で急遽感染症対策を迫られた中、各市町村がそれぞれに対策をとり、本市では公共の社会教育関係施設を全面閉鎖したわけだが、このことについてある委員から、市民の人権としての学習権を制限するという観点からより慎重な議論と対応が必要だ、という意見が上げられたことを記しておく。

(8) コロナ禍に再開した定例会、および、社会教育活動の状況（令和2年6月～8月）

緊急事態宣言の効果か、ゴールデンウィーク明けから新型コロナウイルスの感染者数は徐々に落ち着きを見せ始め、国や都もさまざまな活動の再開に向け動き始めた。

当定例会は6月18日に再開し、この日は短時間であったが久しぶりの会議で様々な現状について語り合うことができた。委員のひとりはこの数か月の一連の出来事を、「人類の歴史上においても、産業革命並みの変化だったといつても過言でない」と表現した。この日の出席委員から様々な状況を聞くことができたので、6月以降の様々な社会教育活動がどのような状況であったかを整理したい。

①社会教育関係施設について

(ア) アキシマエンシス

5月12日より、窓口業務の一部を再開し、予約資料の受け取り、貸出中資料の返却、リクエスト本の受付ができるようになった。このときは順路が一方通行に決められ、図書館部分や郷土資料室内に立ち入ることができなかったが、6月9日より全面再開、はじめの1週間は新聞雑誌の閲覧や座席の利用は不可であったが、来館者は2,400人を超えた。翌週からは学習室等の利用も可能になり、グループで学習したりする姿も見られた。

(イ) 市立会館等公共施設

6月1日から公共予約システムと簡易印刷機のみ利用再開となり、各施設の利用は6月15日から再開された。ただし、再開当初はカラオケを含む音楽活動全般、調理、飲食、軽体操、運動に準じた活動に制限が設けられた。6月22日より活動の制限はなくなったが、各利用施設の定員を半数程度にするなど新型コロナウイルス感染症拡大防止のための対策が講じられた。

②団体活動について

(ア) 体育協会

6月8日から、感染拡大防止対策をとることを条件に施設の利用ができるようになったが、各協会主催の新入会員獲得のための教室は中止となっている。体育協会の本部役員会が7月30日に実施され、今年度第1回目となる理事会が、8月21日に開催出来る見込みとなつた。

(イ) 文化協会

定例理事会は6月から再開し、会議時間を午後7時から5時半に早めこととなつた。また、本来春の芸術祭の際に実施していた文化功労賞の表彰も延期していたが、規模を縮小し8月に実施することになった。

(ウ) スカウト育成連絡協議会

緊急事態宣言の解除を受けて日本連盟、東京連盟が作成した感染拡大防止のガイドライン、文部科学省の学校再開に向けたガイドラインを参考にして、6月中旬から活動を再開した。しかし、7月になって感染確認の人数が大きく増加するようになったため、独自の判断で7月中旬には再び活動を自粛して感染状況を注視することとした。8月になっても感染確認の人数が急激に減少することはなかったが、日本連盟、東京連盟の感染拡大防止のためのガイドラインのほか、地域の状況をも踏まえた独自のガイドラインを作成し、8月中旬から活動を再開することとなった。

(エ) 学習サロン活動、生涯学習サポーターの会まなぶンの活動など

徐々に活動を再開しているが、3密を防ぐ工夫をしながらの活動となっている。生涯学習サポーターの会まなぶンの活動は、講座などで人が集う場をやつしていくことは難しいと考え、屋外での活動や動画の配信、他の子育てグループとのコラボレーションなど新たな方法を考えている。

③学校教育について

6月1日より学校再開となった。はじめの4日間は学級内時差登校、次の4日間は午前授業と段階的に学校生活を再スタートさせた。昇降口での健康チェック、手洗いの徹底、校内でのマスク着用など、しっかりと感染症防止対策を取った。児童・生徒アンケート等による心のケア、臨時休校中の学習課題のフォローなどにも取り組みながらの再開となった。対面して話し合ったり、大人数で交流したりする活動などは制限せざるを得ず、人との関わりをよりよくつくっていくような活動について、再開後も課題として残った。

これまでと大きく違う点を挙げるならば、新型コロナウイルス感染症防止対策の観点から、PTAやウイズユース、ボランティアなど地域の人と連携したくても直接的な関わりが困難な状況になっているということだ。これは学校にとっても、地域にとってもこれからの方を模索しなければならない大きな課題の一つではないだろうか。

このようにさまざまな活動が再開したわけだが、どの現場でもこれまで通りとはいかず、どうしていくことがよいのか模索していることがうかがえる。社会全体を見渡してもすべての活動が止まってしまったままでなく、これまでの活動を再開・継続するためにさまざまな工夫を凝らしたり、新たな活動を見出して取り組み始めたり、多様な動きが生まれてもいる。

我々は、7月の定例会の前に「アキシマエンシス」の視察を行った。新しくなった郷土資料室は、子供も大人も楽しめる仕掛けが用意され、図書館部分についても

ティーンズ学習室や静寂読書室、自動化書庫など、設備も大変充実している。このアキシマエンシスが市民の活動や生涯学習の拠点となることを期待している。

【参考】審議日程

回	開催日	議論の主なテーマ 他
1	平成 30 年 10 月 4 日	
2	平成 30 年 11 月 22 日	委員各々の所属団体等の課題について
3	平成 30 年 12 月 20 日	
4	平成 31 年 1 月 24 日	
5	平成 31 年 2 月 14 日	ボランティアとは何か
6	平成 31 年 3 月 18 日	・あきしま会議（第 2 回）実施：2 月 9 日
7	平成 31 年 4 月 18 日	
8	令和 元年 5 月 23 日	第 27 期建議の検証 1
9	令和 元年 6 月 20 日	あきしま会議について
10	令和 元年 7 月 25 日	・あきしま会議（第 3 回）実施：7 月 21 日
11	令和 元年 8 月 29 日	第 27 期建議の検証 2
12	令和 元年 9 月 19 日	
13	令和 元年 10 月 24 日	若者と地域、そして社会教育
14	令和 元年 11 月 21 日	視察研修について
15	令和 元年 12 月 19 日	あきしま会議について
16	令和 2 年 1 月 23 日	・あきしま会議（第 4 回）実施：2 月 16 日
17	令和 2 年 2 月 20 日	テーマの確定：対話から地域力を育む社会教育
18	令和 2 年 3 月 19 日	第 30 期のテーマについて
19	令和 2 年 4 月 23 日	建議について ※新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため 書面審議
20	令和 2 年 5 月 21 日	
21	令和 2 年 6 月 18 日	
22	令和 2 年 7 月 16 日	第 30 期活動の記録について
23	令和 2 年 8 月 20 日	

※令和 2 年 2 月 28 日～29 日に予定していた視察研修は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため中止

第3章 市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議について

ここでは我々が柱としている活動「あきしま会議」開催に至った経緯と、各回の様子について記す。

1 経緯

第29期において、市で行われている事業がどのような市民のニーズから実施されているかについて調査した。その中で我々は、「表面的な即効性のあるスキルアップにつながるニーズに応えることだけが大切ではない」、「表面に見えている市民のニーズに単に応えるのではなく、すでに活動している市民を応援することによって、より意義のある活動へと広げていく必要がある」という考えに至った。そこで、社会教育課と連携して、「市民の声を聴く機会と市民相互がつながる機会」を創出するために、早稲田大学非常勤講師の近藤牧子氏に相談し、少人数で自分たちの活動を語り合うラウンドテーブルという方法を用いて、研修会としてあきしま会議を実施することになった。

第1回目については、第29期の建議「市民相互と地域のつながりを育てる生涯学習を推進するための社会教育」の中で触れられており、あきしま会議を社会教育委員の一つの活動として、社会教育関係委員や他部署の職員の参加を促し、継続して開催することを推奨すると述べており、現在に至る。

ちなみに、「あきしま会議」のもととなる考え方は、前項第2-4で触れた第27期の建議「昭島市における地域の活性化に向けた社会教育について」の「地域に向けた方策」にさかのぼり、同建議の「市民に向けた方策」の中では、次のように記されている。

昭島市が掲げる将来都市像のキャッチフレーズ「元気都市あきしま」について、市民が具体的にイメージすることができ、目的意識を持つことができる場として座談会や懇談会等の開催を提唱する。

座談会等では、語り合いの中から気付きや発見を持つことができ、「自分（たち）にも何かできることがある」と連想することで、将来の予想図がより明確になる。そして、その場で得られる人と人とのつながりを糧に、自分たちの力で「できること」に取り組み、発展させていくことが、将来の予想図の実現を可能にする。それは、地域の実情に合ったまちづくりへの源となると考える。

当時のことを知る委員より、ここでいう座談会や懇談会とは、行政と市民の対話の場を想定していたと伺った。我々は、あきしま会議がいざれそうした場になり得るのではないかとも考えている。

2 趣旨

あきしま会議の趣旨は次のとおりである。

- ①社会教育委員・市職員が市民の声を聞き、市民のニーズを把握する場であり、市民が社会教育行政にかかわる人たちに意見や想いを表明する場
- ②今ある社会教育活動を互いに共有し、つながりをつくる場
- ③昭島市の未来について語り合う場

3 各回の状況

(1) 第1回 平成30年5月19日（土）（第29期委員が実施）

参加者数は少なめだが、他部署職員の参加もあった。初の試みということで、はじめは参加者にも戸惑いも見られたが、事例報告に対し活発なやり取りが行われた。

参加者数：25名

会 場：市役所 602・603会議室

報告者数：10名

報告タイトル		報告者
1	ボイスカウトの団委員会について	ボイスカウト 昭島第1団
2	昭島生涯学習サポーターの会まなぶンについて	昭島生涯学習サポーター の会まなぶン
3	弓道教室について	弓道協会
4-1	劇団Firstlineについて	劇団Firstline
4-2	テンダーハート昭島TOKYO体当たりについて	テンダーハート昭島
5	「地域文化の会」	地域文化の会
6	サークル杵柄（さーくるきねづか）	サークル杵柄
7	社会教育委員としての活動を振り返って 小学校での土曜日補習教室について	個人参加
8	「多摩りばクラブ」について	多摩りばクラブ
9	小中学校における茶道体験のあり方について	個人参加
10	子どものサロンび～の（福島町）	子どものサロンび～の

【参加者の感想】

- ・他の方のお話が聞けて良かった。報告の準備をすることで整理ができた。自分の活動や団体のことをより知ることができた。
- ・「地域愛」とは、「地域の人とのつながり」が大きな要素だと感じた。地域で活動している方々といかにつながるか、また、つながっていない人たちをいかに受け入れていくかを再考する機会をいただきありがたく思った。

- ・他の活動グループの実情を知る良い機会となった。活動の精神など参考になるものが あった。
- ・様々な団体の方のお話しがうかがえて勉強になったし楽しかった。また、省察の重要性と自分の実践の中にこそ専門性があるという先生のお話しが胸に響いた。
- ・昭島市の中の熱い方々とお会いすることができ、よい刺激をもらった。話することで自分の振り返りになった。皆さんの反応を見て、自分の活動に魅力があることが確認できた。
- ・名前は知っていても活動内容まで知らなかつたので、そんな活動もしているのだと新しい発見がたくさんあった。ちがう活動だけれど、同じ想いを感じることができて良かった。

【社会教育委員会議での振り返り（平成 30 年度第 3 回定例会（6月 28 日）】

①今回の成果

- ・これまで自分だけの世界しか知らなかつたが、いろいろな人と関わっている人がいるということを知ったことは大きな成果だと思う。直接会って聞いてみなければ、見てみたい、携わってみたいなどそこまで発展した気持ちにはならなかつた。

②団体の課題

- ・団体の孤立というものをすごく感じた。みんな一生懸命やっているのだが、団体としてまとまるようになると、孤立して悩みを団体の中で抱え込んでしまっているのだと思う。何が邪魔しているのかわからないが、同じような活動団体との情報の交換ができていない。団体の孤立を防ぐために、団体の名刺交換会的なものがあるといいのではと感じた。

③今後の課題

- ・市民ニーズとしては、楽しく学べる、その機会を提供する、その先、意識していないところを意図的につないでいくということであり、その仕組みづくりが今回の大きなテーマかと思っている。

これらの意見を踏まえ、実施報告書では次のように記している。

「あきしま会議」は、市民の主体性を尊重しつつ、「捉える」「活かす」「つなげる」ことができる場として、また、社会教育委員や社会教育活動に携わる者の力量形成の場としても、大いに期待できるものである。

(2) 第2回 平成31年2月9日(土)

第29期の意志を引き継ぎ、今回より第30期が主体となって実施した。他部署の市職員だけでなく社会福祉協議会職員の参加もあり、想定より多くの参加者があった。

参加者数：42名

会場：市民ホール

報告者数：15名

	報告タイトル	報告者
1	親子からシニアまで将棋を楽しもう	みんなの将棋サロン
2	老人クラブについて	ゴールドクラブ
3	昭島の魅力発見ツール 学んで作ろう あきしまカルタ	昭島生涯学習ソーター の会まなぶん
4	アトリエ村「絵の会」の活動を通して見える子どもと親に対する地域での支援	アトリエ村「絵の会」
5	学校と連携	個人参加
6	車人形体験会と車人形講習会の活動	三多摩車人形の会
7	地域のママたちで立ち上げた こどものサロン び～の	こどものサロンび～の
8	もうすぐ創立30年! 児童合唱団「つばさ」って?	児童合唱団「つばさ」
9	ボーイスカウトの団委員会について	ボーイスカウト 昭島第1団
10	子どもの居場所 あのねの会について	あのねの会
11	「多摩りばクラブ」について	多摩りばクラブ
12	0歳から参加OKの音楽コンサート 「アンサンブル balena」	アンサンブル balena
13	演劇から学ぶ自己肯定感	劇団 Firstline
14	パソコン・スマホ、何でも相談・勉強会	パソコン・スマホ、 何でも相談・勉強会
15	おうちでうける療育、学習支援、お母さんの心理 相談から地域交流へ	昭島サポートスクール このはな

【参加者の感想】

- ・一見違う方向性の活動が議論していく中でつながっていくのが不思議でよかった。第2ラウンドの時に、「このことって、第1ラウンドのときの〇〇と共通する話ですね」という形で話が広がった。
- ・今回で2回目だが、参加のたびに新しい発見がある。各団体共通した課題もあり、解決に続ける話もあり、大切なのは自分の活動に情熱を持っていることの素晴らしいと思った。

- ・他の活動を聞いて、自分の活動のあり方を考える方がいた。交流することは大切なことだと思った。
- ・自分の所属している組織を深く掘り下げるものの難しさを感じた。報告者が聞き手に対して「聞いてみたい何か」を持っていないと、ただの活動報告になってしまふ。もちろん、ただの活動報告でも共感や仲間づくりにはつながるのでそれなりの成果になるのだが、より深い話し合いをしたいと思った。

【社会教育委員会議での振り返り（平成31年度第11回定例会（2月14日）】

①今回の成果

- ・あきしま会議に参加された方は市内のごく一部の人なのであろうが、学校ではやりきれない部分に対し、子供に関わるボランティアの方々がいらっしゃることがわかつた。活動をしている人どうしがつながっていれば、同じような活動でもよりその人に合いそうな活動を紹介することもできる。そのようなネットワークができていくと、困り感を抱えた人たちも助かるのではないかと思った。

②団体の課題

- ・コアになる人がいないという問題はどの団体にも付きまとうことだ。ある役割を持つてもらえれば、協力者はいる。何を協力者にしてもらうかを持っておくことも大事だ。

③今後の課題

- ・活動をどう継続していくかも含めて、学校だけではなく、地域の中にいろいろな居場所のあることの大切さ、子供たちの自己決定力や自信を身につけていく場が地域の中にあることの大切さが話題になった。
- ・肝心の活動がおろそかにならなくなってしまわないように、サポートしてくれる活動があると助かるかもしれない。
- ・どういう人たちが参加しているか、全体的な情報交流ができるとよい。

（3）第3回 令和元年7月21日（日）

この回では、東京学芸大学の社会教育実習生2名のほか、市内の中学生2名の参加があり、参加者の幅が広がった。

参加者数：36名

会 場：市民交流センター

報告者数：10名

	報告タイトル	報告者
1	自分ができることで社会貢献 学ぶ・活かす・人とつながる生涯学習	パソコン・スマホ、 何でも相談・勉強会
2	まちゼミでファンを作る	昭島市商工会
3	高齢期の住まいと居住支援	高齢者住まい相談室 こたつ
4	自治会館を活用するための管理運営組織	昭文自治会館 管理運営委員会
5	健やかな成長を応援する民間の場	親と子の自由空間ほっと
6	ガールスカウト活動	ガールスカウト 東京都第123団
7	生涯学習サポーターの活動を振り返る	昭島生涯学習サポーター の会まなぶん
8	地域に憩いの場と情報交換の場を創る	あおぞらみんなカフェ
9	発達が気になる子供たちそしてその家族と関わって	スマイル&ピース
10	多種多様な活動を行い、異文化交流を図る	国際交流部

【参加者の感想】

- ・興味深い活動報告が聞けて、大変参考になった。私自身のアルバイト（施設での勤務）とも通ずる部分もあり、また、将来の職業や生活についても考えさせられる場だった。
- ・いろいろな意見が聞けてよかったです。いただいたお話を参考にして少しでも良い環境等を作れたらいいと思う。
- ・自身が関わらない活動や民間の活動について、想いや考えを深く知れて、とてもいい時間だった。市民の方々が関心を持つこと、その課題について共有できる時間が大切だと思った。中学生の参加に感心した。小さい頃から地域に関心を持てる。聞くだけでも、の気持ちで参加してもらえることは、市民としてうれしい。

【社会教育委員会議での振り返り（令和元年度第4回定例会（7月25日））】

①今回の成果

- ・一見違う分野の話かと思つきや、異文化理解という点ではかなり共通する点があった。お互いを尊重しながら個々を活かせるようになると住みやすくもなりよいという話だった。異分野でもこういう場で出会うことで同じような地域のビジョンが持てることが素敵だと思う。
- ・こうした場は、参加者一人ひとりがつながりを感じることのできる場なのだろうということを感じられる。それぞれが次に活かせるものを得られるのだと思う。
- ・情報交流の場がとてもよかったです。

②団体の課題

- ・指導者の育成や時代の流れに応じることのできる体制づくり

③今後の課題

- ・中学生の方は遅れて場に入られたが、貴重な意見が聞けた。「どうやったら若い人たちが地域のイベントに参加してくれるか」を投げかけたところ、「みんなでいろんなことをやって結果を出せるものがあれば、参加しやすい」という発言があった。その意味は、お膳立てされたものではなく、最初から関わりたいということではないかと思った。

続いて第4回の様子について記すにあたり、直前に行われた社会教育委員会議において、これまでのあきしま会議を振り返り、その意義について議論した。その内容について要点録より抜粋する。（令和元年第10回定例会 1月23日）

社会教育行政をよくしていく、社会教育委員としてさまざまな提案していく中で、市民のニーズをなかなか委員としても理解しきれていない、市民がニーズを伝える場もなかなかない、そこで「あきしま会議」という場をつくろうというのが発端だったかと思う。

ここ3回やってきて、かなり形ができてきたと思うが、ラウンドテーブルという形でいろいろな人が経験や想いを分かち合う、交流をするという流れになっており、ここで原点に返り、付け加えるとすれば、自分自身の活動を振り返ったり、気付きを持ち帰ったりすることからもう1ステップ進んで、自分たちが実現したいこと、昭島をよりよくするためにこういうことができるのではないかということなど、意見・提言の発信があきしま会議からできるようになっていくと、より社会教育委員の本来の想いとも合致するし、市民にとってもより価値のある場になると考える。

それを踏まえてそれぞれの市民活動が地域をより良くしていくための一つであると確認できるとよい。その時にSDGsとつながるそれぞれの活動という整理をして示せたらよい。

あきしま会議をやって感じたことの一つとして、さまざまな社会教育関係団体には、まず活動を少しでも知ってもらいたいというのがある。その後、ほかの団体の話を聞いて、自分たちとの違いや別の魅力を感じることもできる。また、団体だけでは聞くことができない中学生など若い人たちの声を聞く機会にもなっている。世代を超えていろいろな人の考え方を知ることができる場となっている。

青少年の居場所づくりや有用感を持たせる話から、第4回のあきしま会議で中学生、あるいは高校生たちの声を聞こうというなっていったと思う。参加者は大人がほとんど。第4回のあきしま会議を開催するにあたって、青少年の声を多く聞くことはなかなか難しいと思うが、逆に参加する大人たちが、青少年に有用感を持たせる居場所をそれぞれの団体の人たちがどう考えているのかを含めて30期のテーマに結び付け、あきしま会議でやった結果を踏まえてはどうか。

そこで、第4回のあきしま会議では、社会教育委員がこれまでの経緯と趣旨説明をすること、また、SDGs とそれぞれの活動の関係性を示すような話をしてみようということになった。

(4) 第4回 令和2年2月16日(日)

前回参加してくれた中学生が報告をしてくれただけでなく、その友人も参加してくれ、それぞれのグループの中で積極的に関わってくれた。また、市内在住の大学生の参加も見られ、若者の参加も徐々に増えてきた。さらに、他市の社会教育委員の参加もあり、他市からも「あきしま会議」への関心が寄せられるようになったと実感した。今回はこれまであきしま会議を支えてくださっていた近藤牧子氏の都合がつかず、趣旨説明を谷部議長から、ラウンドテーブル後の全体共有の時間でSDGs と活動との関係について二ノ宮リム委員から話題提供することにした。

参加者数：38名

会 場：市民交流センター

報告者数：9名

	報告タイトル	報告者
1	英語というツールを通じての、異世代・異文化交流の楽しみ	おもてなし語学ボラ 自主練サークル
2	Coder Dojo～子どものためのプログラミング道場について～	CoderDojo 昭島
3	生徒の、生徒による、生徒のための学校づくり	市内中学生
4	いじめや虐待など、子どもの社会問題に、地域住民ができること	SCR昭島
5	キングオブホビー アマチュア無線	昭島市アマチュア無線同好会
6	自主保育だけのこの存続に向けて	自主保育だけのこ
7	日本語支援と文化交流の活動を通して	国際交流 ひゅうまんネットワーク
8	スピーチを通じての学び	シルクロードトーストマスターズクラブ
9	自分ができることで生涯学習をサポートして Win・Win	パソコン・スマホ、何でも相談・勉強会、まなぶン

【参加者の感想】

- ・自分が知らない活動ばかりで、もっと知りたいと思った。また、報告してみてこれからどのように活動を進めていけばよいか、特に可視化が重要だと学んだ。このような機会にはまた参加したい。他の活動を知り、自分でできることはしていきたい、つながれるところはつながりたいから。
- ・いろいろな意見が聞けてよかったです。一人一人がしっかりと意識する「つながり」や「居場所」がとても大事。廃校の活用。このような機会にはまた参加したい。いろいろなつながりを持つと成長にいいから。
- ・団体内で悩むだけでなく、いろいろな方、いろいろな場へ相談することの大切さに気付くことができた。たくさんのアドバイスもいただけてよかったです。また、いろいろな方とつながりを持つことができ、心強さを感じる。

【社会教育委員会議での振り返り（令和元年度第11回定例会（2月20日））】

①今回の成果

- ・中学生2名と大学生からの参加があったことはよかったです。
- ・普段我々が学校へ赴くことがない中、中学生の話を聞くことができ、自分が関わっている活動以外の子供たちの様子を知ることができた。
- ・第1回目からずっと報告をしてくださっている方の報告を聞いた。自分自身その方の報告を聞くのは2回目だ。発表の中心になっていることは変わらないが、報告者自身がご自身の活動の変化を実感しているとおっしゃっていた。特に生涯学習サポーターの活動に対し、ご自分が役に立っていると思えるようになっているようだった。報告者へもメリットがあるのだと感じた。

②団体の課題

- ・こうした場に出てこない人たちの中にも「役に立ちたい」と思っている人が一定数いらっしゃり、その方たちへのアプローチをどうすればよいか。
- ・趣味のサークル活動だが、趣味を活かして、ほかの人たちと関わることもやってみたいという発言があった。

③今後の課題

- ・社会教育委員とは何かについて説明をした方がよい。
- ・自己啓発の活動では、自分の能力を伸ばすことだけが目標になっている場合もあり、自分自身で気が付いているニーズと気付いていないニーズがあるのだと思った。そういう内なるニーズをどうあきしま会議で引き出すか。
- ・あきしま会議がどういう会か、今後も何度も話をしていく必要がある。
- ・今後、あきしま会議を通して昭島をよりよくしていく方向に話を進められたらよい。
- ・今回の参加者には活動したいと思っている人が多く集ったように感じた。その後も

続いて動けているとよいと思うし、支援もできるようになればと思う。

4 あきしま会議から見える「市民のニーズ」

我々は、これまでのあきしま会議を振り返って、あきしま会議のテーマ「市民のニーズを活かす・つなげる」の中で、「つなげる」についてはかなり達成できていると評価している。そして、この会議の参加者という狭い市民のニーズなのかもしれないが、あきしま会議に参加されている人たちの話から、「対話の文化を育む機会」、「青少年を含む人々が自己有用感を得ることができるような機会の創出」というニーズを捉えることができたのではないだろうか。

ある委員の発言を紹介したい。

人は自分が思っていること、やったこと、などを聴いてもらいたいし、ほめてもらいたい、何か評価をしてもらいたいものだ。それは、子どもだけでなく大人も同じだと思う。ほめられるだけでなく、反対の立場の意見に対しては反発力となって前に進む力となるということもあるが、そういうことも人の対話の中から生まれるのではないだろうか。あきしま会議は対話の場だ。



第4章 「対話から地域力を育む社会教育」とこれから

「あきしま会議」を社会教育委員の活動の柱に据え、定例会を積み重ねながら第30期のテーマについても検討を重ねてきたわけだが、しだいに「青少年の居場所づくり」「自己有用感」「対話」というワードが会議の中で重要視されるようになっていった。

対話については、ある委員が次のように述べている。

日本にはもともと対話の文化がない。会話はしているし、討論はしているが、対話とは、対等な立場というのが大前提だ。対等な立場でAという意見とBという意見すり合わせてCをつくるのが対話だ。AとBのどちらが正しいかを討論するとか、どちらかが勝つとか、目上の人何かを伝えるという関係性ではなく、対等な人たちが新しいものを生み出していくもののことだ。実は対話の文化というのは新しい文化で、対等な関係を生み出していくことが求められていると思う。若者だけではない。ボランティアのすそ野が広がっていかないというご意見は、今特に顕著になっており、結局そういうものを支えるのは地域のつながりであり、社会教育だ。学校を通じてというものもちろんあるが、子供たちが小さいころから地域の中でいろいろな活動に参加していると、自然とそういうものに参加するハードルも低くなるのではないか。以前の会議で地域活動に参加している子供たちの割合の違いを見せていただいたが、参加率が高い地域は、地域活動に子供たちが参加する流れがあり、それはまさに社会教育だと思うが、それがあることで自然と学校も背中を押してくれることが必要で、地域の人たちともともとつながっていて、「明日来てもらいたい」などと声を掛け合える関係作りも社会教育の役割としてあると思う。（令和2年1月23日）

その翌月の会議での次の発言には、委員の想いが込められている。

なんでもいいから言える場所、周りの人が聞いてあげる場所が必要なのではないか。間違っていてもいい、意見は意見として言える場所、気楽な場所が必要だ。心の居場所づくりは大切だと思う。（令和2年2月20日）

親でも先生でもない大人の存在が必要だと思うし、大人に頼ってよいことを知ってほしい。地域の大人に頼ってよいことを知らないと子供たちも頼れない。社会教育でできることとして、地域の人やサークルの人たちといかに小さい時から関わっていくかというのが大事である。（令和2年2月20日）

これらの議論を経て、第30期のテーマは「対話から地域力を育む社会教育」となった。次回から建議の作成にとりかかるとした矢先、新型コロナウイルス感染症拡大が日増しに広がりを見せ始め、我々の会議そのものが開けなくなってしまった。

しかし、新たな生活様式と言われる中で、我々はこのテーマの下、今後どのようなことが実現できるのか、引き続き取り組んでいきたいと考えている。

おわりに

人と集うことを通して社会の営みを培ってきた社会教育にとって、今回の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策で人と集うことができないという事態は、社会教育の根幹が揺らぎ、危機感を覚えるほどの衝撃だった。

しかし、人間は対話をやめなかった。現在の人類は、形を変えた対話のようなもの、例えば拍手で感謝の意を伝えたり、画像の中に文字を入れたり、対話に代わるもので対話をしながら、何とか元の生活に戻ろうとしている。しかし、しばらくはさまざまな場面でこれまでにはなかった問題に直面し、悩まされることになるのではないかと想像する。その中には、人々が以前の生活と比べて地域にいるようになったことで、地域での人とのかかわりということが今まで以上に重要になってくるのかもしれない。

ただ、社会教育はなくならないし、学校教育もやめることはできない。人々とともに教育を守り、進化させていくには、対話が人間の大切なものであると我々は強調したい。

今期の活動を振り返り、社会教育に携わる者として、社会の中において相手の顔を見て、息あいを感じて、対話する大切さは奥深い人間的なものであると再認識したところだ。それを失わないために、引き続き新しい生活様式の中における対話の環境づくりを社会教育が担っていくことを望んでいる。

さいごに、新たな期の社会教育委員の皆さんに2つのことをお願いしたい。

ひとつめは、新たな日常における社会教育活動の変容、展開を把握し、必要な支援や対応を考えていくことを社会教育委員会議の役目とし、その実現に向けてあきしま会議を継続して開催していただきたい。

ふたつめは、7ページの（5）で記した「市民の人権としての学習権」について、再び今回のような事態になったときにおいても慎重な姿勢で対応できるよう、ぜひ議論していただきたい。

これから昭島の社会教育が、市民の暮らしや生き方を支え、明るい未来を築くものとなるよう、心から願っている。

第30期社会教育委員名簿

(案1)

議長	谷部	憲一
副議長	中村	和喜
委員	稻垣	克康
"	齋藤	真
"	佐伯	孝司
"	長瀬	高志
"	二ノ宮リム	さち
"	濱田	忠明
"	松本	智子
"	吉村	薰

(50音順)

各委員からの一言メッセージ

私たちのこれまでの活動の多くは、「つながりを作る、広げる」ということに重点をおいてきた。特に、あきしま会議では、参加者の間で新たなつながりも生まれただけでなく、市外の研修会や研究大会の議論の場でも、とても高く評価され、外とのつながりもできたと感じている。

ところが現在、今まで通りの方法では、これまでの活動を続けることは難しい。決して「つながりを作る、広げる」ということ自体に問題があるわけではない。むしろ、物理的な距離が必要な現在においては、これまで以上につながりを意識しなければならないと思う。

これからは、「つながりを作る、広げる」に加えて、「つながりの形、あり方」にも目を向けなければならないかもしれません。「どのようなつながりを、どのように作るか、広げるか」という議論を通して、現在の私たちに合ったつながりについて、模索していきたい。

第30期社会教育委員会議がテーマとしてきた「対話から地域力を育む社会教育」はあきしま会議を通して、各事業団体の相互理解や共通する課題の共有など、解決策に結び付くヒントを得られる場となり、また、世代を超えた対話の機会を多く持つことで、世代間の格差を解消することにつなげるなど、社会教育の新たな在り方について、かなりな成果を上げることができた。しかし、新型コロナウイルス感染防止のために、会議の形式や、密を避けるための、従来とは違った形を求められことになった。

このような状況に悲観しているだけではなく、各界が新たな在り方を生み出し、創意工夫をしているように、社会教育もまた、このような窮地を肯定的にとらえることで、その先に生き残る道を見出してゆくことが必要である。

第30期の活動において、新型コロナウイルス感染拡大は、これまでに経験したことのない状況を生み出した。ワクチンや新治療薬の開発や発売がなされるまでには、もうしばらく時間を要すると思われる。しかし人々の知恵と工夫によって、なんとかこの国難を克服していくのではと期待している。我々も、これらの対策の中から社会教育委員としての活動で一つひとつできることを積み上げていくと同時に、活動の記録を残しておくことで、将来新たに別の緊急事態が起きたときの礎の一部になれば幸いと考える。

新型コロナウイルスの出現により、これから社会教育も、新しい生活様式を取り入れた教育が求められてくると思われ、それにどう創りあげていくかが課題となってくると思っている。

あきしま会議を通して、世代を超えて対話の機会をつくること、そこから市民のニーズを発信していくことの重要性などを実感した。また市民の活動の多くが、いわゆるボランティアであるという話から、ボランティアについても学んできたが、今後もさらに理解を深めが必要であると思う。

新型コロナウイルスの流行は、今後の生活様式を一変するものになると思われる。「新しい生活様式」の中に、社会教育をどのように組み込んでいくのか考える上で、今期の社会教育委員会議の活動の記録が少しでも生かされることを期待する。

第30期昭島市社会教育委員会議 活動の記録

令和2年9月17日 発行

昭島市社会教育委員会議

問い合わせ：昭島市教育委員会事務局生涯学習部社会教育課
〒196-8511 東京都昭島市田中町1-17-1
電話 042-544-5111（内線 2252）